

## 中世前期の城館について

### ― 畠山館・真田城を中心にして ―

山 本 實

#### 一 はじめに

中世前期の城館を考察するため畠山重忠の畠山館（埼玉県大里郡川本村本館）、菅谷館（同県比企郡嵐山町菅谷）、岡崎義実の岡崎城（神奈川県伊勢原市大宮）、真田義忠の真田城を取り上げた。これらの武士は中世前期の武将であり、城館は畠山館以外は中世後期にも使用されている。

畠山重忠については、渡辺世祐氏・八代国治氏<sup>①</sup>、貫達人氏<sup>②</sup>の人物を中心とした論著があり、『埼玉県史』第三巻においても武蔵武士の典型として扱っている<sup>③</sup>。これらの論著には畠山館についても論及しているが簡単に触れている程度である。また、川本村では畠山重忠公史跡保存会があつて、研究が盛んである<sup>④</sup>。

これに対して岡崎義実・真田義忠についてはあまり知られていない。それぞれの城については『日本城郭全集』第四巻の中で伊礼正雄氏<sup>⑤</sup>が詳しく述べておられる。最近では丸茂武重氏<sup>⑥</sup>が、『日本歴史地理総説』中世編の中で扱われている程度である。

ここでは畠山館と菅谷館の移動の理由、岡崎城と真田城について、相模平野西部地域への三浦氏の進出拠点としての意味を、それぞれ歴史地理的に考えてみる。

## 二 自 然

川本村は荒川と越辺川に挟まれた比企北丘陵の北側で、中位段丘面上に位置する。第三紀中新世の松山階の比企北丘陵は開析が著しく進行し、開析谷の方向は北東―南東、あるいは西北西―東南東を示している<sup>⑦</sup>。この丘陵には同じ方向に幾筋かの断層が通っており<sup>⑧</sup>、市ノ川も推定断層線に沿って開析が進んでいる。市ノ川は比企北丘陵の北側斜面に水源をもっているが、荒川へは流下せずに寄居町今市の街村集落の南側を丘陵縁辺部に沿って流れ、やがて丘陵内を南東方向に流れてゆく。開析谷の幅は約二五〇―四〇〇メートルである。比企北丘陵の南側に都幾川が流れているが、この川は嵐山町菅谷で西から溪谷の中を流れてくる槻川を合流し、やがて越辺川となって入間川に注ぎ更に荒川へ流入する。

比企北丘陵は大体が針葉樹に掩われており、丘陵縁辺部は比高約一〇〇―一五メートルの段丘面となっている。この付近における水田は、吉野川流域の沖積地を主とし、段丘面には僅かに存在するのみであり、昭和二十九年の調査<sup>⑨</sup>でも吉野川流域の本田村は八十二町余の水田をもっていたが、段丘面の畠山村は二町余であった<sup>⑩</sup>。全体的に見ればこの付近一帯は桑畑中心とした畑作地帯であったが、最近では荒川から取水する山王用水が段丘面を灌漑し、これによって陸田化が進行した。

## 三 畠山館と菅谷館

### (一) 畠山館の遺構

畠山館について『新編武蔵国風土記稿』（以下同書を『新武記』

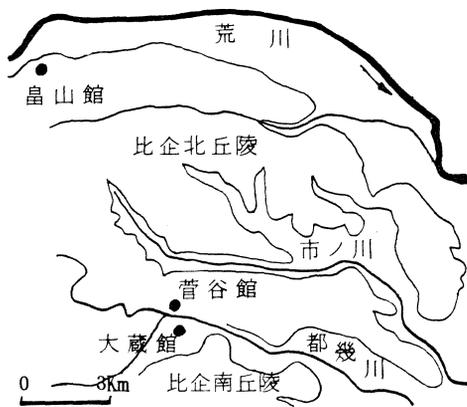


図1 畠山館・菅谷館の位置図

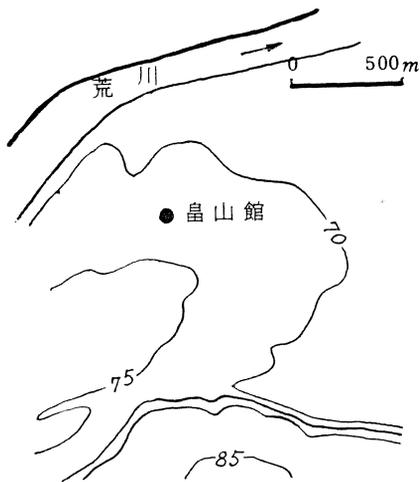


図2 畠山館

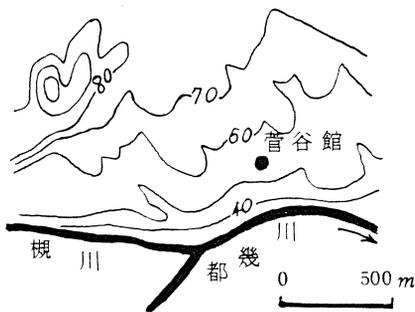


図3 菅谷館

と略す)⑪にある記事を要約すると次の通りである。  
 (A) 村の中程にあり広さは一町平方で平坦地である。  
 (B) 小土手が遺っており、館址には八幡社がある。  
 (C) 八幡社の後に五輪塔がある。  
 (D) 重忠の井と呼ぶ古井戸が付近にある。  
 以上の四点について今少し詳細に検討を加えてみたい。  
 (A) 現在館址として保存されているのは、東西約四五メートル、南北約五五メートルである。『川本村の史蹟』では、東西、南北とも三十間としていて⑫、『新武記』の一町四方とはかなりの差がある。『新武記』をはじめとする江戸時代の地誌は、中世城館研究に欠くことのできない史料ではあるが、小室栄一氏⑬が指摘されているように、面積、距離、方位などは必しも正しくない。更にこれ

らの史料が編纂された当時の遺跡の現状を示しているのだということも留意しなければいけない。  
 中世城館の面積について豊田武氏は、『武士団と村落』⑭の中で、中世初期の館は二、三反前後から五、六反前後であるとして島田豊寿氏の論文を引用されたが、島田氏の論文⑮では、第一期豪族屋敷を中世末期のものとしている。次に小室栄一氏⑯は、中世初期にみられる単郭式方形館の面積は、複郭式館城に比べて遙かに広いとされ、その理由として「素朴な外部的攻撃力との相関関係」ばかりでなく、中世領主権が未完成な状態にあることも考慮する必要があると提起されている。「館址周辺の同族の安全を計らんとした精神」が中世初期城館をして広大な面積にしていると述べられた。これは籠瀬良明氏⑰が、「集落そのものが武装した」と述べておられるの

に通ずる。

ここで中世前期城館として大蔵館（埼玉県比企郡嵐山町大蔵）を考えてみよう。大蔵館は帯刀先生義賢の館とされていて<sup>(18)</sup>、『新武記』<sup>(19)</sup>では方一町としている。実測図では『埼玉県史』第二巻<sup>(20)</sup>と小室栄一氏<sup>(21)</sup>のものがある。現遺構は『埼玉県史』に載せられているものからみるとだいぶ崩されているが、大きさは東西約一七〇メートル、南北約二一五メートルあって方一町よりはかなり広い面積である。『新武記』の記事には次のようにある。

村ノ西方ニアリ方一町許リ、構ノ内ニ稻荷社アリ今ハ大抵陸田トナレリ、カラ堀及ビ塘ノ蹟残レリ、此ヨリ西方ニ小名堀ノ内ト云フアリ、昔ハ此辺マデモ構ノ内ニテ……

現在大蔵神社のあるところは御所ヶ谷であり、堀内はここより北側にある。しかし『新武記』の記事は、村の西方にある方一町許りの地域と堀内と呼ばれている地域は区別されていると思われるので、この遺構については規模の点について検討の余地があると思う。それは後日別の機会に譲ることにして、少なくとも大蔵館の面積は方一町以下ではないであろう。

そこで畠山館について『新武記』の記載を一つの拠りどころとして考えてみる。川本村は土地改良事業が進められ、土地景観は一変してしまっただが、地籍図によって以前の状態を知ることができる。これによると一町四方よりも少し大きい方形のプランが想定される。これは現館址を北東の隅において考えたもので、館址の南と東には土地の人が古い道と称している一本の道が通じていて、館址のすぐ東側には庚申塔が建っている。地籍図で館址を調べた場合、堀など

が水田となっていたりして規模を調べ得るが、畠山館にはそのような遺構も見い出されない。したがって地籍図から館址の規模を想定することはできない。

(B) 小字名を「八幡」（ヤハタ）という。現在は北方約六〇〇メートルのところにある井棕神社に明治四十一年に合祀されている。『新武記』によれば天治年中（一一二四〜二六）に勧請された。井棕神社も同じ時に秩父郡吉田郷芦田村から勧請されている<sup>(22)</sup>。

小土手は館址の北側に約四〇メートル、東側で約三〇メートル、西側で約五五メートルある。この中で東西方向の切断面をみると基底部約二メートル、高さ約五〇センチメートルある。しかしこれらの土盛は外側からは畑地になっているから容易に確認できるが、内側は全体的に西側が緩傾斜をもって高くなっているの見分けにくい。今、東・西・北の外側からみた場合に『新武記』にある小土手らしきものが認められるとしたが、そのように考えると土塁に区画された部分が館址ということになってしまう。しかし(A)で述べたように、百数十騎の武将の館にしては小さいと思う<sup>(23)</sup>。また、遺構そのものも見方を変えれば全体的に高くなっている壇状のものとも考えられる。

次に土塁に関連して堀の問題を考えてみたい。籠瀬良明氏<sup>(24)</sup>は、築城というものを天然の防禦性とそれに対する要工事性という関係で論じておられる。防禦性が天然のものとな人工的なものにより一〇パーセントに発揮されなければならない。畠山館の場合、堀の存在についての記録・伝承はない。平坦地立地であるから土塁だけの場合、かなり堅固な土塁でないと防禦力は弱い。堀があった場合、

これも立地条件から推測すると四周を繞っていたであろう。一般に水濠は徒渉を困難にする意味と同時に、中世城館の場合は灌漑用水としても利用される。畠山館の場合、段丘面上に立地するから水濠とはならない。用水の問題は(D)で詳論する。結局、堀の問題については推測の域を脱しない。

(C) 五輪塔は現在では六基ある。

(D) 重忠の井は、生湯の井戸と伝えられている。中世城館の立地を考える場合、飲用水の問題は重要である<sup>(25)</sup>。(A)で触れた大蔵館の南西にある鎌形村には源義賢の子・義仲の生湯の井戸が伝えられている。本畠は前に少し触れたが洪積台地上に位置している。地質は物見山砂礫層であり、透水性が大きい。したがって飲用水は得にくい。畠山館付近をみると、重忠の井が館址の東隣りの田中一好氏宅裏庭にある。現在は石囲いがあるだけで使用されていない。この位置から東へ十数メートル離れた同氏宅の井戸は、水道が敷設された現在でもよく使用されており、この家より更に道路を挟んだ東方の家もよい井戸を持っている。重忠の井戸と田中一好氏宅の井戸を結んだ線上に良好な地下水脈が通っていることになる。しかもこの線より数十メートル南北方向にはずれてしまうと、井戸水はあまり良くないという。洪積台地上においてかなり狭い範囲でしか良い飲用水が得られない。その水脈上に館は立地していた。

以上で『新武記』の記事の検討は終る。次に畠山館と菅谷館の立地条件などを比較しながら、移動の理由を考えてみる。

最初に文献をみると『吾妻鏡』の文治三年十一月十五日条に「武蔵国菅谷館」とあり、元久二年六月二十二日条には「小倉郡菅谷館」

とある。これに対して畠山館は文治三年十一月二十一日条にみえている。文治三年の記事は、梶原景時の讒言に抗議して畠山重忠が鎌倉から武蔵国へ帰ってしまった時のものである。十一月二十一日条は、源頼朝が下河辺行平を使者として派遣したことを述べている。

この畠山館とあるのを川本村の館と解釈すると、十五日条の方に菅谷館とあるから、下河辺行平は菅谷館に向ったところ、重忠は川本村の方へきていたので、ここまで行平も訪ねてきたということになる。しかし、場合によっては戦闘を覚悟しなければならぬのだから、立地条件で防禦性の乏しい川本村畠山館へもどる理由はないと思う。『吾妻鏡』の記事は、畠山重忠の館という意味での畠山館であって、具体的な場所をさすのではないであろう。元久二年の記事では、菅谷館が比企郡にあり、畠山館が男衾郡（現在は大里郡内）にあるので混乱する。小室栄一氏<sup>(26)</sup>は、小倉郡へこの時にはもどっていたか、あるいは『吾妻鏡』編者の誤記とされている。誤記と簡単に片付けられるが、私は前にも述べたようにもどる理由はないと思う。裏付けるものがないが、私は畠山館と菅谷館を併用していたのではないかと思う。

## (二) 畠山館と菅谷館の比較

地形 畠山館は比企北丘陵北側の中段段丘面にある。標高は約七

〇メートルであり、五キロメートル東方の三本（大里郡江南村）で約四八メートルである。荒川へは急崖をもって臨むが、比高は約七メートルである。館から荒川までの距離は北方・西方ともに約五〇〇メートルで、館は平坦地の中に位置する。菅谷館は同じ丘陵の南

側にある低位段丘面にある。標高は約五〇メートルで、西側約七五〇メートルのところに標高一〇〇メートルの小山があり、その更に西には標高一七六メートルの大平山がある。北方約一、七キロメートルに比企北丘陵の南縁がきて市ノ川が東流している。東は約五キロメートル離れた所に青鳥城址(東松山市)があり、標高約四メートルある。南はすぐに都幾川が流れ、比高は約二〇メートルある。この川は菅谷のところまで西からの槻川と西南からくる都幾川と合流している。

両館を比較した場合、共通するのは河川近くに立地することである。中世城館における付近の河川は、自然の濠の役目を果たす。荒川の方がこの場合に果たす役割は大きい。しかし館との距離が問題である。敵襲を広い範囲に考えれば荒川は高い防衛能力を示すが、狭い範囲で考えた場合、四方から攻撃される危険度は高くなる。

菅谷館は南方からの攻撃に対しては安全性が高く、主に北・東からの攻撃に備えればよい。

遺構 畠山館の遺構については既に述べた。菅谷館は、小室栄一氏<sup>27)</sup>の調査・研究があり、その中で、現遺構は室町、戦国期の菅谷城と呼ぶべきで、中世前期の館址は本丸址であろうとされている。両館は構造自体は単郭方形館という点で共通すると考えられるが、菅谷館は東方に自然谷があり、(A)に述べたことと考え合わせると、こちらの方が防衛能力が大きい。

交通路 中世関東地方の交通路で鎌倉へ通ずるものを鎌倉街道と呼んでいる。比企丘陵を縦断する鎌倉街道は「上道」で、鎌倉街道中最も華やかな道といわれている<sup>28)</sup>。「上道」は上野・信濃を結ぶ

道で、江戸時代にも重要な道の一つであった。この道は市ノ川の開析谷の中を通り、今市・塚田(寄居町)を通って荒川に達し対岸の花園村へ通じていた。また、今市から赤浜(寄居町)に向って荒川を渡る道もあった<sup>29)</sup>。菅谷付近では館の東方約五〇〇メートルの地点で都幾川を渡り、対岸の大蔵村へ達していた。

次に河川交通について考えてみる。河川は内陸にあっては重要な物資の輸送路である。鎌倉幕府は承久の乱後、河手を取る者が増加したのでこれを禁じている<sup>30)</sup>。荒川、都幾川も河川交通路の役目も果たしていたと考えられる。戦国時代になって、鉢形城主北条氏邦は荒川衆の一人持田氏に対して荒川を通る公方筏以外の筏をよく調べようように命じている。更に氏邦は秩父の定峯(秩父市)の炭焼に対して諸役免除とともに関津料の免除を与えている<sup>31)</sup>。時代は新しいが、荒川あるいはその支流の河川が物資運搬に利用されていたことを示している。都幾川については文献史料はないが、流量、川幅などから考えて利用されていたと考えられる。畠山館・菅谷館の河川交通を考えた時、都幾川は荒川水系の川であるから、距離の点で相異が生ずる。

距離 鎌倉が東国の武士にとって重要な意味をもつようになると、鎌倉との距離も多少は問題になるかと思う。畠山館・菅谷館の間は約一二キロメートルある。そして丘陵を越えるだけだから移動の困難さは無視してよいと思う。両館の距離は館を移動させた理由の中でどれだけの比重を持つだろうか。

源頼朝は建久元年十二月に京都から鎌倉へ帰る時、最後に酒匂宿に泊り、ここを午前四時頃出発して午後六時に鎌倉に到着している

(32)。酒匂宿と鎌倉の間は約四〇キロメートルある。建久六年の上洛の帰りは黄瀬川宿（沼津市）から二日で帰っているが、上洛時の記事などからこの場合は箱根を越えたと考えられる。『玉葉』(33)には平頼盛が相模国府に泊った記事があり、ここを頼朝城より一日の行程であるとしている。相模国府は『吾妻鏡』治承四年十月十六日条に「相模国府六所宮」とあるから、大磯町国府新宿付近の国府をさす。また、頼朝城は鎌倉のこと(34)だから約二八キロメートルの距離である。

二つの史料をもとにして考えた場合、畠山館、菅谷館は半日程度の距離だといえる。しかし騎馬を考えた場合はあまり重大な距離の差とは言えないだろう。

以上四点について館を移動した理由を考えたが、移動したことでマイナスになる要素はない。プラスの要素の中で特に大きいのは防衛力の点であろう。荘官の館として建てられたものは農村経営の中

心である。荘園内における武士の屋敷は、平地に建てられるのが普通である(35)。菅谷館とは称しているが、軍事施設としての中世城郭の要素が、構造面でなく、立地条件からみてあるように思われる。畠山重忠は治承四年十月に頼朝投降してから、文治三年十一月までの七年の間に、軍事的に防衛力の強い菅谷を選んで館を移したと思われる。

#### 四 岡崎城と真田城

今までみてきたように畠山館と菅谷館が一組の関連あるものと考えられるが、次の岡崎城・真田城も城主が親子であり一組のものと考えられる。

#### (一) 立地

両城とも相模平野西方の洪積台地上に位置する。岡崎城のある台地は伊勢原市東大竹が最も高く五二メートルである。台地の東側は

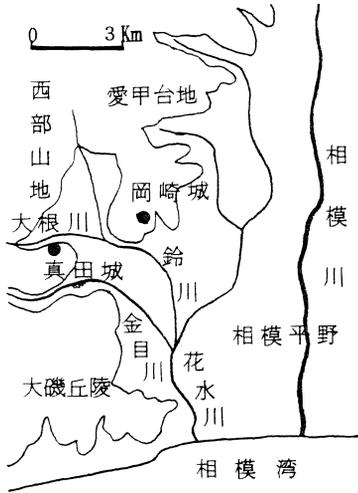


図4 岡崎城・真田城の位置図

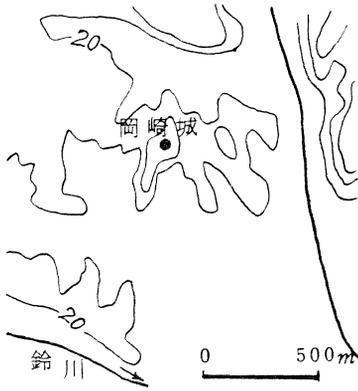


図5 岡崎城

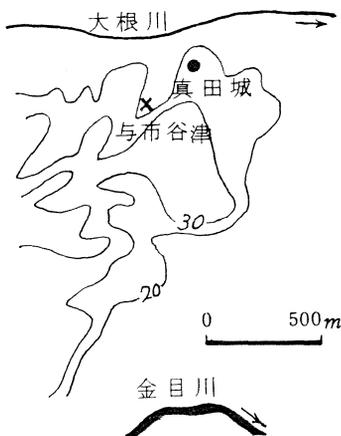


図6 真田城

玉川などの小河川が相模川に平行して南下し、花水川となって相模湾に注ぐ。西側は主として鈴川の形成する沖積低地で、一五メートル前後である。この低地を挟んで真田城があり、両城は約一、五キロメートル離れている。こちらの台地は丹沢山塊の東側に続き、この台地の北側を大根川が西から東へ流れ、南側は大磯丘陵との間を金目川が同一方向に流れている。両河川は花水川に合流する。

### (一) 岡崎城

岡崎城は真田義忠の父、岡崎義実の城である。城址は現在、帰命山無量寺境内となっている。この台地は開析が進んでおり、城址の南方で約二〇〇メートル、東側で約一二〇メートルの幅を示す。この低地と城址の比高は約二〇メートルで、南側では約一二メートルで急崖となっており、約四五度の傾斜を示している。

構造については伊礼正雄氏<sup>36</sup>の調査がある。立地について触れておけば、小河川の開析で残った台地の東端付近の高所（標高三一メートル）に選地されている。城自体は南部だけが崖に接している。『新編相模国風土記稿』<sup>37</sup>（以下『新相記』と略す）に依れば東北五十五間、南四十五間、西・北五十間とあり、方一町に少し狭い面積で、これは現存遺構の範囲と一致する。

### (二) 真田城

真田城は現在、万種山天徳寺の境内となっている。標高は約二七メートルで、低地との比高は約一〇メートルある。城址の西側に小さな谷があり、一番奥の上野ハッ氏宅には今でも良い水を出すとされる湧水がある。更にこの谷の西側にこの付近では大きな深い谷が続いており、小字名を奥から与市谷津・大谷津・中之谷津・谷津

（ヤト）・久保・池田・鬼城と呼んでいる。中世の水田が営まれるのが谷津などといわれるところであり、与市谷津と名付けられたのが、湧水近くにあることなど興味深い。

遺構は『新相記』に四方に堀があると見えているが、現在は東西に確認できるだけである。城址の北東の低地を鬼城（オンジロ）といっているから鬼門と考え、大手は南方と考えられる。真田城は三方崖であるが、急な崖ではないから堀も大きなものであったと考えられる。

飲用水は、城址の東側の空堀を横切って降りたところにある。十数年前に比べ次第に小さくなっているが、今日でも湧いている。

交通路は、台地の中央を東西に横断する道があり、小字名に宿矢名（秦野市）、宿、小道（平塚市）がある。宿には濠状道路となっているところがあって、最近鎌倉街道遺構との報告<sup>38</sup>があった。宿の陶山忠氏宅は家老屋敷と呼ばれている。これは真田義忠の郎等・豊三家康の子孫の家と伝えられている。

### (四) 築城の意義

岡崎義実は三浦庄司義継の四男である。三浦半島に殆んど一族が散在しているのに対し、石田氏<sup>39</sup>とともに相模平野に進出し、二人の子、義忠と土屋義清も平野西部の台地に館を構えている。

真田与一義忠は石橋山合戦で頼朝方に、一五騎の兵を引きつれ<sup>40</sup>副將軍として参陣するが敗死する<sup>41</sup>。義忠には三人の子供がいたが、建保元年の和田義盛の乱に、義盛方として岡崎左衛門尉実忠とあり、義忠子としてある。更に岡崎与一左衛門尉父子三人とあるから<sup>42</sup>義忠の死で真田氏は絶えて、義実のもう一人の子、義清も土屋氏を継

いでいることから、実忠が岡崎氏を継いだと考えられる。また、城郭の点から考えても立地・構造面で岡崎城の方がすぐれていることも、真田城が捨てられた理由と考えられる<sup>(43)</sup>。

相模平野西部への進出をはかった岡崎義実は、大磯丘陵一帯に広がる中村莊司宗平と姻戚関係<sup>(44)</sup>を結んで、真田、土屋(平塚市)を押えるが、武家社会の新しい事態の重大な時期に義忠を失って蹟き、秦野盆地の波多野義景と波多野本莊をめぐる争いに敗れ<sup>(45)</sup>、失意のうち死んでゆく<sup>(46)</sup>。その後の和田の乱で義実の子孫は絶え、岡崎も近藤左衛門尉に与えられてしまう<sup>(47)</sup>。

## 五 結 語

中世前期の城館四つを、二つのグループにして考察を試みた。

まづ従来あまり詳細な報告のない畠山館の遺構を『新編武蔵国風土記稿』を基礎に考察し、現遺構より規模は大きかったのではないかとの一応の結論を得た。

次に畠山重忠が館を畠山から菅谷へ移した理由として、プラスになると思われる点を両者の比較の中から考えた。結論は鎌倉を中心とした武家政治の開始に対応して、主に立地条件の点で軍事的価値の高い菅谷館へ移ったと考えた。

一方、岡崎城・真田城は、三浦氏の一族である岡崎義実の相模平野進出の拠点となったものであるが、その重要な継承者である真田義忠の死、和田の乱による一族の敗死によって挫折したのである。

これらの城館を考察するに当って、例えば真田城に関連しての与市谷津の問題など調査研究が不十分な点もあるが、今後、中世城館の研究を進めてゆ

く中で検討してゆきたいと思っている。

## 注

- ① 渡辺世祐 八代国治(一九一三) 武蔵武士 第六章
- ② 貫 達人(一九六二) 畠山重忠 人物叢書九二
- ③ 埼玉県(一九三三) 埼玉県史 第三卷 鎌倉時代 一七一頁～一七五頁
- ④ 畠山重忠公史跡保存会の事務局長の中山良作氏は、川本村文化財保護委員でもある。調査の折、御教示いただき、資料も貸していただいた。
- ⑤ 伊礼正雄(一九六七) 日本城郭全集 第四卷 九三頁～九五頁 (岡崎城) 一三四～一三五頁(真田城)
- ⑥ 丸茂武重(一九七五) 日本歴史地理総説 中世編 二二二頁
- ⑦ 日本地誌研究所(一九六八) 日本地誌 第六卷 二一九頁～二二〇頁
- ⑧ 埼玉県(一九七四) 埼玉県地質図
- ⑨ 埼玉県(一九五四) 武蔵国郡村誌 第九卷 男衾郡
- ⑩ 本田村と畠山村が合併して本畠になった。
- ⑪ 新編武蔵国風土記稿 男衾郡 大日本地誌大系 第一五卷
- ⑫ 川本村教育委員会・川本村文化財保護委員会・川本村郷土を知る会共編 川本村の史蹟
- ⑬ 小室栄一(一九六五) 中世城郭の研究 三〇五頁
- ⑭ 豊田 武(一九六三) 武士団と村落 五三～五四頁
- ⑮ 島田豊寿(一九六七) 城下町の歴史地理学的研究 四二頁～四六頁
- ⑯ 前掲⑬三〇三頁～三〇五頁

- ⑰ 籠瀬良明（一九五七）中世の館と地形 現代地理講座 第一巻 一二七頁
- ⑱ 埼玉県文化財保護協会（一九七二）埼玉文化財 第一二号九頁  
 ～一〇頁では義賢の武蔵出張の時の別業であるとしている。
- ⑲ 前掲①比企郡 大日本地誌大系 第十三巻
- ⑳ 前掲③第二巻 奈良平安時代 四三四～四三五頁 第五〇図
- ㉑ 前掲⑬別冊六二図 本文は二五六頁～二五九頁
- ㉒ 畠山井 神社縁起（一九七二）埼玉叢書 第六巻 二二〇頁～二二二頁
- ㉓ 吾妻鏡 元久二年六月二二日条 新訂増補国史大系 第三二巻  
 以下の吾妻鏡は全て国史大系本による。
- ㉔ 籠瀬良明（一九四一）戦国時代に於ける武蔵の台地城郭について―城郭選地論第六報―日大三中研究年報 第六輯 吉田静致先生古稀祝賀記念号 一六〇頁
- ㉕ 一志茂樹（一九五七）城館址の形態とその史的考察 信濃 第九巻一〇号 七頁
- ㉖ 前掲⑬二五七頁
- ㉗ 前掲②
- ㉘ 阿部正道（一九六六）鎌倉街道について 人文地理学の諸問題 一五頁～一六頁
- ㉙ 小川町（一九六一）小川町史 六九頁～七一頁 花園村（一九七〇）花園村史 四四頁～四五頁
- ⑳ 鎌倉幕府法新編追加一九九 弘長二年七月一日付（一九五五）中世法制史料集 第一巻 二二〇頁 更に新編追加一一五 弘安四年四月二四日付にも津料河手事が見えている。 二四八頁
- ㉑ 北条氏邦奉行連署書状（一九七五）新編武州古文書上 榛沢郡二〇号文書 六二九頁 北条氏邦印判状 右と同書 秩父郡二五号文書 六七一頁
- ㉒ 前掲⑬建久元年二月二八日、二九日条
- ㉓ 玉葉 卷三九 寿永二年一月六日条
- ㉔ 大類伸 鳥羽正雄 日本城郭史（一九三六）二〇三頁
- ㉕ 今井林太郎（一九三八）中世に於ける武士の屋敷地―特にその付属地の耕作に就いて―社会経済史学 第八巻四号 一〇二頁
- ㉖ 前掲⑤
- ㉗ 新編相模国風土記稿 大住郡 大日本地誌大系 第三八巻
- ㉘ 前掲⑥ 一一二頁
- ㉙ 伊勢原市石田に石田城址がある。
- ㉚ 源平盛衰記 二〇 石橋山合戦事
- ㉛ 三浦系図 続群書類従 第六輯上
- ㉜ 前掲⑬建保元年五月二日、三日、六日条
- ㉝ 前掲⑬建保元年五月六日条の和田合戦討死の人々の中に佐奈田春八の名がある。吾妻鏡にはここだけに登場し、討死した他の三浦一族とは離れた所に記載されている。義忠との関係は判らない。
- ㉞ 前掲④真田義忠の母が中村荘司宗平の女で、義清は宗平の子、土屋宗遠の養子である。中村一族は他には土肥氏、二宮氏がおり、大磯丘陵一带を押えていた。
- ㉟ 前掲⑬文治四年八月二三日条 義実は頼朝による御成敗に負け罰として一〇〇日間鶴岡八幡宮 勝長寿院で宿直する事を命ぜら

れる。しかし九月二一日に、義実の郎従が箱根で山賊を捕えたので許されている。

(46) 頼朝は建久元年正月一五日に箱根神社・伊豆山神社に参詣した際、石橋山の義忠と豊三家康の墓を訪れている。その後、幕府も時々義忠追善供養を鎌倉山内の証菩提寺（横浜市戸塚区上郷町）で営んでいる。義忠は死後もこのように扱われたが、義実は正治二年三月一四日に政子亭を訪れ、窮状を訴えている。同年六月二一日、八九才で没する。墓は証菩提寺に伝えられている。

(47) 前掲(23)建保元年五月七日条 和田の乱の論功行賞として与えられている。



## A Study of Castles and Mansions in Early Medieval Age; Around the Hatakeyama mansion and the Sanada castle

Minoru YAMAMOTO

The author has investigated the Hatakeyama and the Sugaya mansion, or the Okazaki and the Sanada castles by historico-geographical approach. The seigneur Shigetada Hatakeyama possessed the Hatakeyama and the Sugaya mansion. According to the Shinpen Musashinokuni Fudokikou, the former could be assumed rather bigger than its present remains. The author is bringing light on the motivation of his moving from the former mansion to the latter, comparing its reasons as follows: 1) geographical features 2) remains 3) transport route-nets 4) distance to Kamakura Among them, 1) seems to be the most substantial, because, though the Hatakeyama mansion was located on the flat country, the Sugaya mansion was on the steep precipice along the Tsuki river. That is, the latter mansion could be much more strongly defenced.

The Okazaki and the Sanada castles, whose castellans were linked with one family, the Miura, were significant for this family to invade the Sagami plain. The author worked out that their intention was eclipsed through the death of Yoshitada Sanada at the battle of Ishibashiyama and through the Revolt of Yoshimori Wada.